

高等学校におけるチーム支援の現状と課題 —エピソードシートの活用の視点から—

41825005 亀島 麻衣子

1. 研究の背景

近年、高等学校における発達障害等の特別な支援を必要とする生徒への指導・支援に関する研究が進んでいる。梅津・玉木(2014)は、高等学校の実態把握の現状と課題として、教師と生徒が接する場面が授業場面に限られがちであることや、教科や場面によって生徒の状態が異なる可能性も大きいことから、生徒の実態把握のためには教師間での情報共有が重要であるとしている。また、高校生が思春期や青年期のさまざまな発達課題を抱えていることに加え、学習や行動、対人関係、不安や緊張による心理状況などが多様化かつ複雑化していることから、幅広い領域にわたって生徒のニーズを探っていく必要性を示唆している。多くの高校生が学校適応に苦戦をしている現状を鑑みた場合、支援のための見立てを基にしたチームによる支援の重要性が想定される。

チームによる支援に関しては、様々な研究が蓄積されている。例えば、石隈(1999)は、3段階の援助サービスのモデルを提示している。まず、「一次的援助サービス」では、すべての子どもが課題に取り組むうえで何らかの援助を必要としているという考えから、「すべての子ども」を援助サービスの対象にしている。一次的援助サービスの担い手の中心は教師であるとされ、入学時の適応や学習スキル、対人関係などにおける促進的援助と予防的援助を主に行う。また、この段階でのスクールカウンセラーの学校組織に対するコンサルテーションも大きな役割を果たすとしている。コンサルテーションとは「異なった専門性や役割をもつ者同士が子どもの問題状況について検討し、今後の援助についての在り方について話し合うプロセス」のことである。「二次的援助サービス」は、登校しぶりや学習意欲の低下など、発達課題や教育課題の取り組みに困難をもち始めたり、これから問題をもつ危険性が高かったりする「一部の子ども」に対して行われる援助サービスである。学級担任や教科担当の教師が、このような援助ニーズの大きい子どもを早期に発見し、援助を開始することとなる。また、養護教諭や保護者との連携、スクールカウンセラーからのコンサルテーションも大きな働きをする。そして、援助の必要な子供を発見し早期援助を検討するために、学年会や教育相談委員会の活用が有用であるとされている。「三次的援助サービス」は、不登校やいじめ、LDなどの問題状況により、特別な援助が個別に必要な「特定の子ども」に対して行

われる。いわゆる特別支援教育として特定の子どものためのチームが結成され、子どもの問題に応じて、学内のチームと学外の関係機関が連携をとることになる。この3段階の援助サービスでは、様々な援助者がチームになって子どもを援助する「チーム援助」が大事であるとされている(水野・家近・石隈, 2018)。また、2015年に文部科学省の中央教育審議会から「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)」が発表され、「チームとしての学校」で子どもたちに対する支援を進めることが喫緊の課題として投げかけられている。

しかし、学校組織の構造的な変革や教員定数の確保のほかにも、現場で進めていくことのできる日常的な「チームとしての支援」の〈かたち〉というものがあるのではないかと考える。それは梅津・玉木(2014)が示唆する、チェックリストなどで把握した生徒の実態を教師間で情報共有する〈かたち〉であり、石隈・田村(2003)が提案する「援助チームシート」の実践のような〈かたち〉である。

2. 研究の目的

そこで、生徒の実態把握を担任のみならず、教科担当者や部活動顧問、養護教諭など多くの教師の情報を重ねて共有していくことをねらいとし、生徒の実態把握の際に教師が共有できるワークシートの作成を検討したい。ワークシートは富山県総合教育センター教育相談部で開発された「ep」で使われている「エピソードシート」を改変する。エピソードシートは生徒の言動を「エピソード欄」に記入し、「生徒の心情を想像する欄(通称、もくもく)」を書き添える様式である。生徒の心情に寄り添う実態把握により、日常的に的確な支援が行われ、特別な支援が必要と判断されたときには、epの特徴でもある構成的なケース会議を通して情報共有ができることや、チーム支援につなげることが期待できる。

チーム支援については、富山県総合教育センター(2018)に示されている「チームによる支援の在り方」を参考にした

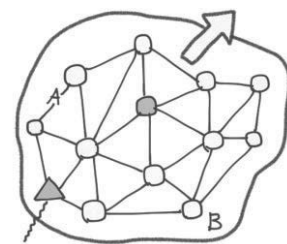


Figure1 方向性をもったチーム (富山県総合教育センター, 2018)

い。ここにいう「チームによる支援」とは、教師が相互につながりあって、方向性をもってはたらく協働的で機能的な集団というイメージである (Figure1)。

エピソードシートの改変については、ep のねらいの一つでもある「学校がそれまで積み上げてきた経験や文化、独自の工夫を加えて、学校ごとの特色あるチームによる支援の〈かたち〉を生み出す」という流れにのせて行う。

エピソードシートの試用版をまず提案し、S 高校の教師に聞き取り調査を行う。その結果の分析を基に更に改変を加え、最終的に S 高校の生徒の実態、生徒支援の現状に合わせた「エピソードシート S 高校モデル」を再提案できるようにしたい。

既存のエピソードシートの様式を踏まえて、以下のように改変を行った (Figure2)。

- 面接や日々の指導を通しての生徒の記録の媒体とする。
- エピソードごとに日付記入欄を追加し、エピソードが時系列で分かるようにする。
- 「家族構成欄」を「家族構成・友人関係欄」とする。
- 1 枚完結型ではなく、エピソード累積型とする。

以上を踏まえて本研究では、エピソードシートの活用を模索する過程を通して、S 高校の教師と一緒にチーム支援の〈かたち〉を考えていくことを目的とする。

3. 研究の方法

20XX 年 4 月～5 月に、S 高校の教師 33 名を対象に、エピソードシートを生徒理解のための記録媒体および情報共有の基礎資料として使うことを提案し、エピソードシートの試用版を配布した。その後の試用期間を経て、20XX 年 11 月に、提案したエピソードシート活用による教師の生徒理解や情報共有、チーム支援につなげることの可能性について、また、S 高校の生徒支援に役立つ〈かたち〉について聞き取り調査を実施した。調査協力者は 1・2 学年に所属する学級担任と学年主任、養護教諭の 11 名である。

なお、試用版エピソードシートについては、S 高校では「ep シート」という通称で定着してきたので、以降「ep シート」と記述する。

質問項目は「① S 高校の生徒について」「② ep シートの使い方について」「③ ep シートの様式について」の 3 つとし、あらかじめ質問項目を聞き取り対象者に提示したが、対象者の立場や回答に応じて追加の質問や意味の確認、新たな質問も加えて面接を行った。面接は一人 30 分間、S 高校の面談室で実施した。

Figure2 試用版「ep シート」

調査の結果は、逐語データを作成し、KJ 法を用いて分析を行った。同じような言葉での回答であっても、協力者の会話中の意図を重視し、切片に加えた。

4. 結果と考察

KJ 法を用いての分析の表記については、大項目を《 》、中項目を【 】, 小項目を〔 〕具体的な言及を『 』とする。

(1) S 高校の生徒について

聞き取り調査の質問項目「① S 高校の生徒について」の結果から、S 高校の生徒が全体的に「おとなしい」[真面目]な印象があることが示された。この印象が質問項目「② ep シートの使い方」において、『生徒が落ち着いていたので、使うタイミングがなかった』『生徒指導的な問題がなく、気になる生徒が特にいなかった』ため「使わない可能性」があるという言及につながったのであろうと思われる。

しかし、石隈・田村 (2003) は、これまで「いい子」でいた子どもは、自分の本当の気持ちを出せずに、嫌なことにも無理やり適応しようとし、いい子なりの様々なストレスを抱えていることを指摘している。これは、S 高校の生徒が全体的に「調和的」な傾向にあることと符合するように思われる。また、学年が上がり適応しなければならぬ課題が増えた時に適応できず、自尊心の危機が訪れた場合、エネルギーの低い子は不登校に向かう可能性があることを示唆している。S 高校の生徒の印象として「意欲が高いとは言えない」ことも挙げられており、『エネルギーが低い』とい

う言及もあった。一見重大な問題を抱えていないように見えるS高校の生徒も潜在的に不登校となりかねない性質があることが懸念される。また、【心配される印象】として、SNSを介した友人関係トラブルを抱えた生徒や、無理にでも調和的であろうとして破綻しそうな生徒がいることも伺える。S高校においては、「すべての生徒」を対象にした一次的援助を中心に行い、気になる生徒については、「早期の危機対応」「予防的配慮」といった二次的援助（石隈・田村，2003）のための体制を速やかにとれることが望ましいと思われる。

(2) S高校の生徒支援の現状について

聞き取り調査の結果、S高校では【学年中心の支援】を基本とし、実際に【学年中心の支援】が「できている感触」をもっている教師の言及が7件あった一方で、「できていない感触」をもつ教師の言及も同数あった。同様に【学年部会の活用】についても、「できている点」と「できていない点」がほぼ同数挙げられている。ただし、【学年主任と担任の連携】においては、ほとんどが「できている感触」への言及であり、【副担任との連携】においては、ほとんどが「できていない感触」であることから、学年中心の支援チーム体制の捉え方が一様でないことを示しているように思われる。つまり、学年主任と担任が連携できていれば十分であると感じる教師とそうではない教師との差異の表れであろうと考えられる。【学年部会の活用】が「できていない点」として『情報交換だけで終わってしまう』ことについての言及もあり、情報共有の次の段階を望む学級担任の思いも伺える。

【学年外からの支援】については、「養護教諭との連携」がよく行われていることが明らかになったものの、その連携の実際としては養護教諭と学級担任のつながりが主であり、学年部会に養護教諭が同席することはないため、『養護教諭にまで情報が届かない』『養護教諭が気になる生徒が学年部会では取り上げられないこともある』という現状を生んでいる。同様に、学年外の「部活動顧問からの支援」や「教科担当者からの支援」を期待する言及も多く、学年団を中心に学年部会で情報共有を行っても十分に生徒支援を行うことはできないと感じる教師や、S高校の「チーム支援体制」が明確なもの、あるいは組織的なものになってほしいと感じている教師が多いのではないかと推察する。

(3) epシートの使いやすい〈かたち〉について

7月時点でS高校の教師全員を対象に予備調査を行ったところ、epシートを記入してみたという回答は1件のみであった。そこで、各学年で「ep体験会」を行った。epシートを学級担任に記入してもらい、学年団に養護教諭を加えて30

分のケース会議をもったところ、epの有用性から、ようやくepシートの活用を意識してもらえようになったと感じている。それは、聞き取り調査での質問項目「②epシートの使い方」の結果に、「epのよさ」についての言及が多くあったことから明らかである。【epの基礎資料】としてのepシートの「利便性」についての言及には肯定的なものが多く、epの参加者に部活動顧問や学年外の教科担当者が含まれることを望む言及も散見されたのは「ep体験会」を通してのことであり、ケース会議との連動を前提とすることをS高校の《epシートの使い方》の〈かたち〉とすることには問題がないと考える。

また、【指導の記録】媒体としてepシートを使うことについては賛否があった。手軽感に肯定的に受け止められたが、『重大な問題を抱える生徒の記録には物足りないのでは』という懸念が挙げられた。しかし、前述の考察の通り、S高校の生徒は一次的援助を中心に進めることができるであろうことから、epシートの様式で十分記録媒体としての役割を果たせると判断する。聞き取り調査ではepシートの記入項目についての異議がほとんどなかったことから、面談や指導の記録がエピソードとして時系列で蓄積される様式として使える〈かたち〉であると考えられる。

【情報共有の土台】については「みんなで書く」「みんなで見る話す聞く」ことへの期待が高く、紙媒体ではなく電子データで書き込む提案が多くされることになった。この提案には「チーム支援の雰囲気づくり」への期待も含まれており、ひいては「S高校のチーム支援の〈かたち〉づくり」への期待の高さが表れているとも考えられる。S高校では情報管理の意識も高く、生徒の「エピソード」や「家族構成」は個人情報として管理が徹底されるべきであるということから、紙媒体なら鍵がかかる場所に保管すべきであり、電子データならパスワード設定や無用な印刷禁止などルールづくりの必要性も提案がされた。

5. まとめと課題

(1) 「epシートS高校モデル」の概要

学級担任だけではなく教師全員で気づいたことを蓄積し、教師全員が閲覧できる様式を前提にするため、紙媒体ではなく電子データで記録することとする。電子データ版epシートはエクセルファイルで作成し、校務用LANの共有フォルダ内に置くことで「いつでも、誰でも」記入・閲覧が可能になる。主に記入する項目は試用版の通りとするが、「気になるエピソード」セルの横に「日付」と「記入者名」の各セルを追加する。「該当する領域」はプルダウンリストで選択し、一目でわかるよう色分け表示する。「本人の気持ち」は

「もくもく」ではなく四角いセル枠になる。「一つのエピソードにつき1行」で記録を蓄積し、必要があれば「日付」や「記入者」「該当する領域」でソートできるようにする。エクセルファイルはクラスごとに作成し、生徒個別のシート（シート名は学籍番号）と生徒一覧シートで構成する。生徒一覧シートには、部活動や進路希望も備考として学級担任あるいは副担任が入力する。各生徒についてスピンボタンを設置し、「いいね」と「気になるね」をカウントできるようにする。共有フォルダ名は「〇年度入学生」とし、1年生から3年生までのデータを継続して残すことで、申し送り資料としての活用も可能となる。ただし、個人情報取り扱いには十分に留意する必要がある。S高校の校長には、epシートを電子データ入力とし校務用LANに保存する事について承諾を得たが、セキュリティ上、配慮すべき具体的な点については教育委員会に問い合わせる予定である。

また、電子データ版 ep シートに記録が蓄積されてきた時には、ケース会議を行うことを前提とする。ケース会議用の ep シートは紙媒体とし、蓄積したエピソードの中から3つ選んでコピーし、貼り付け、印刷する。「エピソード」「日付」「記録者名」以外の項目は印刷後に手書きで記入し、「本人の気持ち」は「もくもく」枠に書き込む。ケース会議の基礎資料としての ep シートを書き上げたら、コピーしてケース会議への参加を要請したいメンバーに事前に配布する。ケース会議が終わったら紙媒体の ep シートは回収し、1枚だけ残して処分する。ep シート1枚と記録写真を印刷したもの（A4サイズ）は共にファイリングし、鍵がかかるロッカーに保管する。ロッカーの鍵はテストロッカーや生徒指導要録用ロッカーの鍵と同じ保管場所とする。

以上の〈かたち〉でS高校のチーム支援の促進を図りたい（Table1）。

Table 1 「ep シート S 高校モデル」の概要

使い方	様式	項目
指導の記録 情報共有の土台 申し送り資料	電子データ	・エピソード ・日付 ・記入者 ・該当する領域 ・本人の気持ち
ep の基礎資料	紙	・上記の項目 ・家庭・友人関係

本研究の聞き取り調査においては、S高校の教師たちから当事者意識で捉えた具体的な提案を聞くことができたことに深く感謝している。そして、当事者意識で考えるからこそ浮かぶ懸念材料として聞かれたのが、『今後、誰が音頭をとるの

か』ということであった。

西山（2018）は、定着する取り組みとして成果をあげるためには、校内全体の取り組みとしてミドル・リーダーがマネジメントすることが好ましいとしている。経年的で「ぶれない」取り組みとして実施し続けるためのマネジメントを教科指導や分掌業務、部活動業務と並立させることは大きな困難があるが、こうした困難を乗り越えるためには組織的な工夫や改善も必要である。

協力研究校の中学校で2年間の実習を行った際、カウンセリング指導員が生徒への支援をつないでいる〈かたち〉を見るにつけ、「カウンセリング指導員」という職務が、高等学校にはまだ導入されていないことを残念に感じた。池田・石津（2017）によると、カウンセリング指導員は、富山県の一部の公立中学校に配置され、児童生徒や保護者へのカウンセリング等による援助・指導を遂行するため、授業や部活動を担当しないことを原則とし、コーディネーター役として、校内の連絡・調整に当たる教育相談担当教員である。文部科学省（2017）通知による「教育相談コーディネーター役の教職員」と同様の職務であり、今後は、高等学校でもこうした教育相談専任教員などの設置による、「ぶれない」取り組みがなされることが期待される。

「チーム支援」には教師の協働性の促進と学校組織の構築の両輪が伴う必要があることを実感している。活用までに検討すべき課題はまだ残されているが、S高校の教師全員で取り組む中で、バージョンアップしていく「ep シート S 高校モデル」となること、そしてチーム支援の〈かたち〉となることを願っている。

【主要参考文献】

- 池田宗介・石津憲一郎. (2017). カウンセリング指導員の成立とその職務(1)—富山県における教育相談専任教員の発展—. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 12, 41-51.
- 石隈利紀. (1999). 学校心理学：教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス. 誠信書房.
- 石隈利紀・田村節子. (2003). 石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門. 図書文化社.
- 水野治久・家近早苗・石隈利紀. (2018). チーム学校での効果的な援助. ナカニシヤ出版.
- 文部科学省. (2017). 児童生徒の教育相談の充実について(通知)
- 富山県総合教育センター. (2018). 児童生徒へのチームによる支援の在り方に関する調査研究(第2報)—日常的・継続的な支援につながるエピソードプロセスの開発—. 富山県総合教育センター研究紀要, 37(3), 1-42.
- 梅津亜希子・玉木宗久. (2014). VI高等学校における特別な支援が必要な生徒への指導・支援の在り方. 国立特別支援教育総合研究所研究報告書, 高等学校における発達障害等の特別な支援を必要とする生徒への指導・支援に関する研究—授業を中心とした指導・支援の在り方—, 126-128